



TITLE:

# 一八九〇年代ロシアの経済思想の 動向 - ロシア経済思想史の特徴づ けに関連して -

AUTHOR(S):

田中, 真晴

---

CITATION:

田中, 真晴. 一八九〇年代ロシアの経済思想の動向 - ロシア経済思想史  
の特徴づけに関連して -. 経済論叢 1964, 94(2): 92-114

ISSUE DATE:

1964-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/133012>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十四卷 第二號

---

時間短縮の可能性と労働組合 …………… 前 川 嘉 一 1

一八九〇年代ロシアの經濟思想の動向 …………… 田 中 真 晴 16

管理會計の性格 …………… 野 村 秀 和 39

オートメーションと直接的生産労働者 …………… 小 谷 節 男 40

---

昭和三十九年八月

京都大學經濟學會

## 一八九〇年代ロシアの經濟思想の動向

——ロシア經濟思想史の特徴づけに関連して——

一 は し が き

田 中 真 晴

わたくしは前稿において、一八九〇年代のロシア資本主義論争の特徴と背景を述べた<sup>1)</sup>。本稿はいますこし視野をひろげて、九〇年代ロシアの經濟思想全体の動向を展望しようと思う。この仕事は、かなりの程度においてそれ以前の過去にさかのぼることなしには果されないのであって、ロシアにおける經濟思想の歴史的展開の特徴に注目することによってのみ、九〇年代ロシアの經濟思想の動向の説明が可能となり、また九〇年代ロシアの經濟思想をあきらかにすることが、ロシアの經濟思想史の特徴を見定めることに寄与するはずである。

このような仕事はロシア經濟思想史の個別の研究がもっと進んでからでなければできないはずだ、という意見もあるであろうし、本稿で述べるところが、およそすべての研究は仮設的・暫定的な性格をもつという一般の意味をこえて仮設的・暫定的性格をもつことをわたくし自身意識するのであるが、他面からいえば、ロシア經濟思想史の研究がそれだけで孤立したローカルなものではなく、經濟学史研究の一環として組みこまれうるためには、貧しくともと

かく全体の見通しをつける試論が必要である。またたしかにわが国のロシア経済思想史研究の層はうすいとはいえ、個々のテーマについての論稿はかならずしも稀少ではないのである。

さて、ロシア経済思想史の特徴づけに関連して九〇年代ロシアの経済思想の動向を考察するというテーマへの接近方法として、わたくしは第一次的には経済思想の主体の社会存在論的位置に注目しようと思う。すなわち具体的には、(1)ソファールリズム体制、(2)大学およびその他の中間的施設または集団、(3)革命運動をふくむ在野陣営を、ロシアにおける経済思想の社会存在論的場所の三大カテゴリーとし、それぞれの場所での経済思想の展開をたどることとする。この方法は、学派的編成の経済学通史のいくつかの個所においてロシアにおけるその流派を述べる方法と異なることはもちろんであるが、わたくしは経済思想史をイデオロギー史に還元しかつ一国内の閉鎖的思想史としてとらえる方法に賛成するのではない。ロシア経済思想史は西欧経済思想の流入・摂取・変容という視点なしには成りたちえないのであって、一国内的・自生的な経済思想の展開史への傾斜をもつ見方はしりぞけられねばならない。

本稿はロシア資本主義論争自体からひとたび遠ざかるが、本稿の帰結としてロシア資本主義論争の分析視点がある程度定められるはずである。

- (1) 「一八九〇年代ロシア資本主義論争の特徴と背景」(『経済論叢』九二巻五号)。本稿はそれに接統するが、前稿の副題「プレハノフと一八九〇年代論争」は継承しない。本稿はプレハノフからはいっそう遠ざかり、かつ私の一連の論稿のなかで相対的独立性をもつからである。
- (2) 以下の行論は、その都度参照するように、それらの論文によって個々の経済思想の理解を助けられている点が多い。もちろん、わが国におけるロシア経済思想史研究の論稿は本稿に引用したものがそのすべてではない。
- (3) 現在ソビエトで書かれる経済学通史は、この方法でロシアを織りこんでいる。例として、ローゼンベルグ・ブリュネーミン共著『経済学史上・下』(広島・橋本共訳、一九四〇年新版第一巻の訳)が「ロシアにおける重商主義」「ロシアにおけるスミス学派」「ロシアにおける空想的社会主義」を章のレヴェルで述べている。Карацов Н. и П. Грешанов, История экономических учений, 1953. はマルクス主義成立にいたる

までの概説計二〇章のうち九章でロシアに關説し、История экономической мысли, т. 1. под редакцией И. Д. Удальцова и Ф. Я. Полянского, 1961. は計十八章のうち三つの章をロシアにあてている。他も大同小異である。

- (4) 二卷四冊計二八〇〇頁を越える龐大な共同労作 История русской экономической мысли, 1955-1960. はこのような傾向をもっている。ソビエトの経済学史研究者のあいだでおこなわれた「経済思想史か経済学史か」をめぐる方法論争は服部文男「エヌ・カラターエフ、エム・ハイジンナ共著『経済学史』」(研究年報『経済学』二三卷三号)に紹介されている。同氏の紹介以後に、経済思想中流の主張として、Брежнев, Л. О соотношении экономической мысли и экономической науки, Вopr. Экон. № 10, 1961. がある。

経済思想史の方法論の本質に關しては出口勇蔵「経済学史の本質と類型」(『経済論叢』九三卷二号)の第四節を参照。

- (5) 経済学史における惡しきナショナリズムの例として、ソビエト大百科辞典のデスニツキーの項を参照。デスニツキーがアダム・スミスに学んだことは一応書かれているが、家族と財産制度についてデスニツキーがスミスに拠って書いていることを、あたかもかれ自身の創見であるかのことにいって「セルガンに約百年もさきだつ」發見として賞賛している。См. Б. С. Я. в. 14. стр. 105-106. 経済理論のよい書物ではあるが、N. F. Normano, The Spirit of Russian Economics, 1944. は西欧経済思想のロシアへの流入の全体像をまとめている点で示唆に富んでいる。

## 二 ツァーリズム体制の経済思想

ツァーリズムはビョートル大帝以来、ロシアにおける経済思想のひとつの極、一方の集中点であった。国家が社会の自律的な展開を許さず、社会を呑みこむほどの超絶的な権力主体であるところでは、国家権力のもつ経済思想の比重が大きいことは当然である。ツァーリズムはその権力の大きさにくらべて、国民の知性をたくみに体制のなかへ包摂し利用することに成功しなかったが、ツァーリズムの経済政策や勅令に表現された経済思想は、ロシアの経済思想史のなかで重要な部分を占めている。それだけでなく、たとえ結果においては実現されず、かえって著者が迫害されることになったにせよ、経済改革の諸案がツァーに奏呈されることによって、ツァーリズムはロシアにおける経済

思想のひとつの集中点であつた。

ロシア重商主義の代表作といわれるボツシニコフ И. Т. Посошков (1652?-1726) の『貧困と富とについての書』《Книга о скудости и богатстве, 1724》は、ピョートル大帝に献じられた改革案であり、御用商人の著者はピョートルに改革案を進言したいわゆるプロジェクターたちのひとりであつた。わたくしは、この書物を重商主義から古典経済学への過渡などとする評価はまったく誤つていると考える。著者は農奴制とツァーの超絶的権力を侵すべからざる前提としたうえで、そのワクのなかで地主よりも商人・農民に有利になるような改革を考えていたのであつて、外国商人の排斥・金銀の流出阻止の点において重商主義的といわれうるにしても、全体としては重商主義的要素はすくない。内陸国家ロシアにおいては海洋型重商主義（重商主義の典型はこれである）におけるような貿易の比重の大きさはみられないし、現物経済的基調の経済が金銀・富観の成立をさまたげた。この書物は重商主義から古典経済学への過渡ではなくて、国庫的重商主義の側面をもつ農奴制的絶対主義あるいはアジア的専制主義の経済思想をあらわしている<sup>3)</sup>。

ボツシニコフの著作は、西欧の経済思想をまったく知ることなしに成つたロシアの土着的作品であるが、ツァーリズムは西欧の経済思想の輸入においても中心点であつた。

ツァーリズムは西欧文明の摂取の一環として、またしばしばツァーの啓蒙的ゼスチュアによって、西欧の経済学の輸入をおこなつた。モスクワ大学がデスニツキー С. Е. Десницкий (?-1789)、トレチャコフ И. А. Третьяков (?-1776) をグラスゴー大学に留学させ、『道徳感情論』以後『国富論』以前のアダム・スミスの講義に列したこの二人が、帰国後、著書とモスクワ大学における講義において、グラスゴー大学講義のスミス学説を祖述したことは、シ

アーリズムの文化政策の一環であるにせよ直接には大学の事柄として考えるにしても、『国富論』の最初のロシア語全訳が、アレクサンドル一世の治下、実に当局の命により下賜金を与えられて完成せしめられたことは注目に値する。

ツアーリズムによる西欧経済学の輸入はもちろん、ツアーリズムの利害にマツチするような仕方、すくなくともツアーリズムの存立を危くしないような仕方での学説の採用でしかありえなかった。一八世紀後半エカテリーナ二世のパリ文化心酔期にはメルシエ・ド・ラ・リヴィエールが女帝に招かれ、重農主義学説の普及が試みられたが、それは要するに主農論と農業技術の改善の奨励であるにすぎず、女帝の治下においてロシアの農奴制は格段に強化された。

フランス革命とナポレオン戦争によってツアーと上流貴族のフランス心酔に終止符がうたれ、一九世紀前半には親英的気風に乗ってベンサムとスミスがもてはやされたが、アレクサンドル一世の「自由主義の時期」においても、古典経済学の基底にある市民社会思想を体制側が自己のものとすることは、もとよりありえなかったし、古典経済学のえがく経済社会はロシアのそれとは異質であった。スミスやはりは社交界のアクセサリーであることを除けば、イギリスの製造品とロシアの木材・穀物との自由貿易を利とする貴族と貿易商人のインタレストにもとづいていたにすぎない。スミスは農奴制の基盤を不問に付しての自由貿易の主張という畸形的受容をみた。スミスから出立しながら、ロシアにおいては工業の育成のために保護関税政策をとるべしとしたモルドヴィノフ Н. С. Мордвинов (1754-1845) は、誤ってリストの先駆者と称されることがあるが、かれもまた農奴制を前提としており、産業資本ならぬ農奴主的工業の育成を考えていたのである。

ツアーリズムはクリミヤ戦争の敗北によって、近代的大工業を基礎とする軍事力の充実の必至性に迫られ、農民解放（一八六一）を基礎とする一連の改革をおこなったが、農民解放をふくめてそれ以後一九一七年二月の帝政崩壊

にいたるまでのツァーリズムの経済政策は、資本主義的世界へのツァーリズムの適応運動であり、そのかたちと緩急は国内支配階級内部の力関係に制約されつつ、上からのブルジョワ化という方向規定性に貫かれていた。ツァーリズムの経済思想は、農民解放期以後においてはもはや自由主義への若干の歩みよりとか、啓蒙的粉飾とかではありえず、資本主義化という方向規定をもつ経済政策に具体化されるもの、そのような現実性をもつものでなければならなかった。

ツァーリズム内部において経済政策の主導権をもったのは大蔵大臣であった。大蔵省は産業界との結びつきがつよいブルジョワ的な省で、ツァーリズムのなかでもとくに保守的・地主的な内務省その他としばしば対立したといわれる。レイテルン（大蔵大臣在任一八六二—七八）は自由主義経済の信奉者で、私企業のための信用制度等を整備し、ブング（在任八一—八七）はドイツ社会政策学派の流れをひく経済学者で、農民の負担軽減や工場法の導入をおこない、歴代蔵相のうちでもっとも開明的であったが財政の破綻のために退陣し、ついでヴィシュネグラツキー（在任八七—九二）は穀物輸出と課税の強化により財政の赤字を解消したが九一—九二年の大飢饉により失脚、そのあとがヴィットである（在任九二—〇三）。レイテルン、ブング、ヴィシュネグラツキーの経済思想は省略し、またヴィット（注）の経済政策の内容については前稿で触れたからそれを前提として、ヴィットの経済思想だけを述べよう。ヴィットの経済思想は、九〇年代におけるツァーリズムの経済思想のすべてではないにしても、その主たるものである。

ヴィットをインスパイアしたのはフリードリッヒ・リストであった。リストの生涯と学説がたんにドイツに限らず、イギリスに対しての後進資本主義諸国（といっても世界的視点からすれば中進国ないしは先進国）の産業資本の立場を代弁する面をつよくもっていたこと、それゆえにまた、おくれて資本主義化をはじめた諸国においてリストを楯と



する思想、運動あるいは政策が、ほとんど法則的といつていいほどに普遍的にみられる（とくに一九世紀中において）ことは、経済学史において知られているが、ロシアもそうだったのである。ただし、同じくリストを楯とするといつても、リストがどのようなものとしてつかまれるか、リストのどの側面が切りすてられるかは、各国の客観的条件と主体の社会的性格によつておのずから異らざるをえない。

ヴィットはロシア資本主義の主導的部門である鉄道関係の出身である。かれははじめは鉄道運輸の専門的知識を誇る反面、ロシアの資本主義化に対して当時の平均的インテリゲンツィアがいだいていた懷疑や不安をわかちもつており、ロシアの現実にマツチしその将来をさし示す思想をたずね求めていたところ、リストの『政治経済学の国民的体系』（一八四二）を知り、そこに自己の求めるものを見出したのである。かれは政府に入ったその年に、『国民主義について。国民経済学とフリードリッヒ・リスト』『По поводу национализма. Национальная экономика и Фридрих Лист, 1889』という書物を出したが、それはリストの『国民的体系』を抄録してロシア語に訳し、ロシアへの適用についてのコメントを添えたものであつた。ヴィットはその序文において、リストを現存のドイツの偉大さの予言者として称賛し、リストの書物はすべてのドイツの大学において読まれ、ビスマルクの机上に置かれている、ロシアにおいてもそうあるべきだと述べ、さらにビスマルクを軍事的ドイツのみならず産業的ドイツを建設した政治家として称揚している。鉄道畑出身のヴィットは鉄道の推進者リストにとくに親近感をもち、かつビスマルクをリストの思想の実現者と見たのである。

ラウエによると、ヴィットはリスト抄録とコメントは、保護関税による工業の育成、工業化の緊要性だけを強調していて、リストが産業の十分な進歩の条件として立憲制度を擁護している点にはまったく触れていないが、それは容

易に了解されることである。ヴィットは専制主義の徹底的な信奉者であり、ビスマルクに対するかれの傾倒の一部はそこに由来している。ヴィットはロシアが西欧に追いつくことを願うが、インテリゲンツィアの多くにとつては西欧化はまず何よりも立憲制への移行を意味したのに対して、ヴィットにとっては西欧化は専制主義を堅持しての工業化のことであつた。「現在、世界において偉大な歴史的任務を帯びている諸列強の政治的力は、それらの国民の勇氣によつてだけつくりだされるものではなく、国民の経済的組織にもよつてゐる。一国のそなえる戦力でさえ、軍隊の訓練のゆきとどき加減によつてだけでなく、その国の産業の發展の程度によつても決定せられる。数多くの民族から成る龐大な人口をかかえ、國際的關係においては複雑な歴史的課題を担い、国内の諸利害の錯綜しているロシアは、政治や農業においてばかりでなく工業的にも偉大な国になるためには、他のどの国にもまして、自国の政策と文化のための適當な経済的基礎を必要としてゐる。」「國際的競争は待つてはくれない。もしわれわれが、来るべき数十年のうちにわが国の工業がロシアとロシアの影響下にある——あるいはあるべき——アジア諸国の必要をみたすことができるようになるために、精力的で決定的な諸方策をおこなわないならば、そのばあいには急速に發展しつつある外國の工業が、われわれの関税障壁を突破して、わが祖国と上述のアジア諸国のなかに地歩を固め、わが国の經濟の深部に根をおろすであらう。……わが国の工業の緩慢な發展は、陛下の國の偉大な政治的諸任務の遂行をあやうくするであらう。わが国の經濟のおくれは、政治的および文化的おくれにも導くかもしれない。」<sup>11)</sup>「ヴィットのこの言葉は、資本主義的世界に適應しようとするツァーリズムの經濟政策の担当者思想をあざやかに示している。そこにはある意味での早熟的な帝國主義的志向も欠けてはいない。それはリストが『遺書』において述べた將來の五つの巨大國のひとつとしてのロシアの構図<sup>12)</sup>に対応しているともいえよう。

ヴィットははじめは農業には関心がうすかった。工業化政策の負担は主として農民が背負わされたのであるが、これは、鉄道網の拡張によって農産物市場が拡大し、工業の発展によって農業技術が改善される、一言でいえば工業化の結果として農業も進歩する、だから工業化が一切だ、とだけ考えていた。工業化の至上性についてのかれの信念は終始かわらないけれども、九六年ごろからは農地改革の必要性を感じはじめ、共同体を廃止して、富農中心の農業に移るべきであるという考えを固めていったが、内務大臣その他と衝突し、実現の途にかなかった。ヴィットは農地改革については、リスト『農地制度・零細経営および国外移住』（一八四二）から示唆をえたのではない<sup>13)</sup>。共同体の解体はロシア資本主義の進展が必然化していたところであるし、共同体の解消を主張する思想もめずらしくはなかった。

最後に、ヴィットが、ロシアにおけるいまひとりの情熱的なリスト信奉者であった化学者のメンデレーエフ *Д. И. Менделѣев* (1834-1907) を新設の度量衡局長官に任命し、その心からの支持をえたことを指摘しておく。メンデレーエフはロシアの自然資源の開発、工業の育成、保護関税の主張などについて多くの論稿を書き、八〇年代における民間の保護主義運動の代弁者、九一年関税の支持者であったのだから、ヴィットとメンデレーエフの盟約は、ツァーリズム体制が工業ブルジョワジーの主流を代弁する知性を包摂したことを示しているといえよう。リストを共通項として両者は結びついたのである。

(1) 石川郁男「イワン・ボソシコフの経済思想」(『茨木大学経済学会雑誌』六号)は、読みにくい旧いロシア語の原典(一九三七年復刻版)の感謝すべき内容紹介のほかに諸家のボソシコフ評価を紹介している。渋谷一郎訳「ロシア重商主義」(『明治学院論叢』六九、七二、七五号。これはウダリツォフ、ボリヤンスキー共編『経済思想史』一九六一年の部分訳)はボソシコフ研究の第一人者カーフェンガウスによって書かれている。欧米においてもボソシコフ研究は最近ざかんで、私のみたものに、O'Brien, B., *Ivan Pososhkov: Russian critic of mercantilist*

principles, in ASEER, Vol. XIV, No. 4, Dec. 1935. Parnet, K., Pososhkov as a thinker, in Etude slaves et est-européennes, Vol. VI, No 1-2, 1961, Chambre, H., Pososhkov et le mercantilisme, Cahier du monde russe et soviétique, Vol IV, No 4, 1963.

(2) そのような解釈の典型はボゴジンやブリュックナーであるが、ある面ではいまだ尾をひいている。そのような解釈は生産を重視すればただちに古典経済学的だとする素朴な誤りにもとづいている。経済の自律性、経済法則の客観性に対する認識、社会的分業によってうみ出される商品形態での社会的富の把握こそ、古典経済学をそれ以前の経済思想から区別する点である。ボソシュコフにおいては、国家が経済を呑みこんでおり、経済はすみずみまで国家権力の規制下におかれている。だから「ツァーの富の基礎は国民の富」とか、「流通よりも生産に着目している」ことをもってスミスの先駆者とするのは当らない。

(3) 農奴制的絶対主義というよりもアジア的専制主義の経済思想といつたほうがよいであろう。第一にボソシュコフはツァーの権力の絶対性は無条件的に信じ、農奴制についてはそれほどの絶対性を認めていないふしがある。第二にボソシュコフの信じるツァーの権力は、西欧における資本主義生成期の過渡的権力形態としての絶対主義と社会的性格において必ずしも同一ではないと考えられる。ボソシュコフの経済思想は原著の経済思想ではない。

(4) 水田洋『社会思想史の旅』三八一四四頁。Scott, W. R., Adam Smith as a student and professor, 1937. Appendix VII, pp. 424-31.

(5) Исследование осязательства и причин богатства народов с англичанско. в 4 томах. С.-Петербург: Тип. Иос. Мещинской Коллегии, 1802-1806. がそれである。

(6) Normano, op. cit. pp. 18-28. 一九世紀前半の上流社交界でのスミスはやりを示す一例として、ブーシェキンの『オネーギン』の主人公が「ブダム・スミスを読破して 造詣ふかき経済学者となった……」(米川正大訳、新潮文庫二六頁)とうたわれている。

(7) かんたんには、Лешенко, П. И., История народного хозяйства СССР, т. II, 1952. стр. 174-83. Laue, T. H. von, Sergei Witte and the Industrialization of Russia, 1963, pp. 5-35.

(8) ヴィットテについてはラウエの前掲書と和田春樹「エヌ・ユ・ヴィットテ」(『歴史学研究』二五三号)に拠るところが多い。

(9) この書物は未見。ラウエに拠る。リスト『政治経済学の国民的体系』のロシア語全訳は一八九一年出版であるから、ヴィットテの書物はリストをロシアへ紹介したものである。

(10) Laue, op. cit. pp. 62-63. リスト自身はロシア人への忠告として「皇帝の政府が、十分な都市および地方の憲法を導入し、農奴制を漸時

的に制限して最後には廃棄し、教育のある中産階級と自由な農民階級を養成することによって、国の状態を産業の要求と一致せしめること」を将来のロシアの工業的・商業的進歩の必須条件であると述べている。List, F., Das nationale System der politischen Oekonomie, 1841, SS. 151-52. 農民解放はこの忠告を完全に実現したのではない。

- (13) Докладная записка Барне Николаю II. «Морпорт Меркантиль» т. 2-3, 1935, стр. 134. Laue, op. cit. pp. 2-3. から引用。これはヴァイツテがすでに守勢にたった一九〇〇年二月、ニコライ二世にあつた「わが国の工業の状態について」にみえるものである。

- (12) 小林丹『リストの生産力論』二二一―二二二頁を参照。

- (11) List, F., Die Ackerverfassung, die Zwegwirtschaft und die Auswanderung, 1842. は、はじめ短縮された形で Deutsche Vierteljahresschrift, Heft 4. に發表され、リスト十卷全集版で完全な姿に復元された。リストが産業資本の国内市場創出の前提として、封建的土地所有関係と共同体的諸規制を解消して独立自営の農民経営を確立することを考えたのに対して、ヴァイツテは共同体の解消を、そうした金機構的・基底的意義のものとしては考えていなかったようである。リストの農地改革論については小林丹『フリードリヒ・リスト研究』同氏訳『農地制度』の訳者解説。ヴァイツテの農地改革論については Laue, op. cit., p. 173, 177, 222 f. ヴァイツテの構想がかれの政敵ストルンイヒンによって一部実現されたのは皮肉であつた。

- (14) マンデレーエフの経済学の水準について、シュルツェ・ゲーファニッツは「経済学の専門的教養を欠く」というが、ソビエトの学者たちは「すぐれたロシアの経済学者」「進歩的なブルジョア経済学者」と評価している。Schulze-Gävernitz, Volkswirtschaftliche Studien aus Russland, 1899, S. 251. К. И. Менделеев, Проблемы экономического развития России, 1960, стр. 3. (メンデレーエフの経済著作集のキリチシヨムによる字K) Игорь Иванович экономической мысли, т. II, ч. I, стр. 197. ヴァイツテとの関係については Laue, op. cit., pp. 96-97, 130-31.

### 三 大学の経済学その他

ツァーリズム体制以外の経済思想はもちろんひとつではない。体制そのものと、その対極としての革命運動とのあいだには、体制との親近性あるいは体制の規制力のおよび方において、さまざまな階梯がある。大学は国家の一機関であり、文部大臣のきびしい監視下におかれていた。ゼムストヴォやブルジョワジーの組織は、体制からの規制を大

学ほどには直接にうけない。その意味で相対的自由の度合いは比較的大きい。もちろん、いずれにしてもツァーリズム体制の許容するせまい範囲内での程度差にすぎないけれども。

ロシアにおける経済思想の展開の特徴としてはいくつかの点が考えられるがそのひとつは、経済思想の担い手が、ツァーリズム体制そのものと、反体制的(革命的)インテリゲンツィアの両極にすべく分極して、この二つの中間においてひよいわいことである。イギリス古典経済学は、産業あるいはブルジョワジーの生活実践と適度の接触をもつ教授や在野の知識人、ブルジョワ自体のなかの理論家によって形成展開された。ドイツにおいてはリスト、ロートベルトウス、テューネンなどを別として、経済学は主として大学のものであった。市民社会に対する疎遠さと官僚のための国家学であることのために、ドイツの大学の経済学が特殊なひずみをもったことは知られている。しかしそれはそれとして一応のアカデミッシェ・フライハイトを教授たちは享受していた。ロシアにはイギリスのような市民経済学の土壌が欠けていたことはいうまでもないが、ドイツ的な大学の自治もなかった。一九世紀を通して、経済学をふくむ社会科学の教授たちが大した理由もなしに当局によって罷免された例は数多い。

大学の経済学を支配したのは主としてドイツ歴史学派であった。前節で記した一八世紀後半のデスニツキーらによるスミス輸入は孤立的な事実にとどまった。スミスは一九世紀前半には、ドイツにおけるスミス主義の根拠地といわれたゲッティンゲン大学を通して入ってきた。当時ロシアの貴族の多数の子弟たちが評判のたかい同大学へ留学した。

そのなかにはデカブリストの思想形成者のひとりであるツルゲーネフ Н. И. Тургенев (1789-1871) もいた。ごく大まかにいって、イギリスの経済思想は一九世紀前半にスミス、ベンサムを中心にして、フランスの経済思想は一八世紀後半の重農主義の短期的流行のあと、一八四〇年代には社会主義の諸派が、五〇一六〇年代には産業主義のイデ

オロギーとしてサン・シモン主義が入ってきて、それぞれ影響を与えたが、それらに対してドイツの影響はより持続的・浸透的であった。その理由として、地理的に近いことおよび社会構造に類似点をもつことがあげられるが、経済学、統計学、歴史学関係の初代講座担当者はドイツから迎えられることが多く、ロシアに定住したドイツ人学者もすくなくなかった。経済学の講義の編成やゼミナールもドイツの制度が模倣された。他方ロシアに來たドイツ人学者はロシアの諸制度の特殊性から感銘をうけ、歴史主義的考察の素材を得ることがあった。

ロシアの大学といっても各大学によって同じではないが代表としてモスクワ大学をみよう。モスクワ大学の経済学の中心人物バプスト H. K. Bacter (1824-81) は農民改革期には相當に戦闘的なブルジョワ自由主義の立場をとり、農奴制を批判し資本主義の進歩性を主張したが、改革後には歴史学派に近づき、「スミス主義と社会主義の間としての歴史主義」を主張するようになった。バプストの後継者チュプロフ A. H. Чупров (一八七四年にバプストの後任となり九九年まで在職) はやはり「純粹経済学と社会主義との両極端の中間としての歴史学派」という見解をもっていたが、地主と官僚に対して批判的で、また農業問題については自由主義ナロードニキに近かった。一八九〇年代のモスクワ大学にはほかにカルイシエフ H. A. Карышев、カブルコフ H. A. Кабуков など自由主義ナロードニキに属するひとびとがあり、他方ロートベルトッス、ワグナー流の「国家社会主義」を説いたヤンジュール H. A. Янжул もこの大学に属し、かれはナロードニキ思想には無縁であった。総じていえば、一九世紀末のモスクワ大学の経済学は自由主義寄りの歴史学派を中心として、農業については自由主義ナロードニキ的思想、労働問題については社会政策の思想と部分的にはマルクスにも好意をよせるといった構えであったようである。

モスクワ大学においては農業問題の研究がさかんで、農民共同体の運命につよい関心がもたれていたのに対して、

ペテルブルク大学では農民経済の専門家ヤンソン H. Янсон をのぞいては一般に農業には関心がうすく、もっぱら商工業の研究がさかんであつたことは、二つの首都の性格をある程度反映しているように思われる。ペテルブルク大学の経済学は、一九世紀中葉には、バスティアらフランス俗流経済学の自由放任主義を受け売りしてチエルヌイシェフスキーから手きびしい批判をうけたゴルロフ И. В. Горлов (1814-90) が中心であつた(七四年に辞任)が、合法マルクス主義者のツガン・バラノフスキーが九五年にこの大学の講師に迎えられたことが注目される。国際級の理論経済学者であるかれの就任は、この大学の経済学の従来の水準を一新したはずである。しかしかれは九九年に政治上の理由で文部大臣によつて罷免された(一九〇五年革命後に復帰)。

大学の経済学者のうちでもっとも重要な人物は、ジーベル H. И. Зибер (1844-88) である。マルクスの経済理論を「スミス・リカード学説の必然的發展」としてとらえたことをもつて、『資本論』第二版の「あとがき」でほめられているこの経済学者は、リカード『経済学および課税の原理』のロシア語訳者(一八七三年刊)でもあり、古典経済学からマルクス経済学への学説史的研究をおこなつた最初のひとであつた。かれは専制主義に批判的ではあつたが革命家ではなく、ナロードニキ主義にも着色されず、経済学史と経済史の重厚な研究を残した。七〇—八〇年代におけるかれのマルクス経済学研究は、直接にはロシアの革命思想に結びつかなかつたが、革命思想がマルクス学説をとるばあいのひとつの地ならしの役割りを果たすることになった。だがジーベルは一八七三年から二年間キエフ大学に在職しただけで、その後は病をえて八四年に帰国するまでスイスに住んでその地で主たる仕事をしたのである。かれのばあいは罷免されて去つたのではないが、博識な経済史・法制史研究者コヴァレフスキー М. М. Ковалевский (一八五一—一九二六) がモスクワ大学を罷免されて八七年以降バリに移つたこととあわせて、自由主義的傾向の学究の住みにくい



帝政ロシアの大学を思わせる。ジーベルのほかに、スクヴォルツォフ A. M. Skvortsov が『資本論』を使って仕事をしたが、かれはロシア領ポーランドのノーヴァヤ・アレクサンドリヤ大学の教授で、ギリシヤ正教の信仰あついであった。

つぎにブルジョワジーの保護主義運動について一言しておこう。この運動はもちろん元来は体制そのものとは区別される民間の運動であった。ロシア工業の保護を求める運動はとくに八〇年代にさかんであったが、それはたんに外国資本の競争からロシアの資本を守れということだけから起つたのではなく、ペテルブルクを中心とするバルチック海沿岸諸都市の工業に対する、モスクワを中心とする中部および南部の工業の闘争がからんでいたといわれる。外国産の半製品を原料とする前者が自由貿易を利としたのに対して、国内産の原料を基礎とする後者は、原料の輸入に対しても関税をかけることを主張した。そして中南部の棉工業および鉄・石炭業の利益を現実的基盤とする保護主義運動は、ドイツの一八七九年の「鉄と小麦のための保護関税」に刺激され、自由貿易主義からカルテル保護関税へという先進国の動向と重なりあつて促進された。またロシア工業自体が九〇年代にすでに、鉱業や砂糖においていちやくカルテル的結合を示しはじめるのであるが、民間の保護主義運動のスローガンは「祖国の経済的独立」であり、自由貿易主義に「反民族的」のレッテルをはりつけて地歩を獲得していった。そのさい、スラヴ主義者の民族主義者たちが保護主義運動のイデオログの役割を果たしたといわれる。ところで保護主義の要求は八〇年代につぎつぎに実現のはこびをみ、九一年関税においては十分に達成され、また保護主義のもっとも強力な代弁者メンデレーエフはさきに述べたようにヴィッテの一ブレイシとなつたのであるから、保護主義は九〇年代においてはもはや民間の運動としての独立の意義を失い、体制の経済政策に吸収実現されたわけである。

最後にゼムストヴォについて。ゼムストヴォは一八六四年以来、中央権力に対してある程度の自治権をもち、自由主義的地主の拠点となった。その顕著な例は、トヴェリのゼムストヴォがニコライ二世の即位（一八九四年）のさい、専制の緩和を求める建白書を奏呈したことであるが、皇帝はそれをきびしく拒否し、専制の原理をあらためて宣言した。<sup>11)</sup> そのことは別にしても、ヴィッテはゼムストヴォの自由主義的傾向に対して敵意をもち、それを抑えることに努めた。ゼムストヴォが穏和な自由主義の場所であったことは、自由主義ナロードニキの働きやすい機関でもあったわけ、かれらの熱意ある努力によってつくられたゼムストヴォ統計は、中央統計局の官僚主義的統計にくらべて質がたかく、農民経済の実態分析の基礎資料を提供した。レーニンがゼムストヴォ統計をたかく評価し、縦横に駆使したことは知られている。

- (1) ロシアの経済学者の受難史については Normano, op. cit., p. 13. 大学に対する当局の監督は、学生のサークルが革命思想・運動の場となったことによっていっそうきびしくなり、そのことがまた学生の非合法サークルを生み出すこととなった。この節でいう大学の経済学とは、大学で教えられた経済学のことであって、学生のサークル活動の場としての大学は、一九世紀後半期には、第四節で述べるラジカリズムの育成の場所である。大学制度は一八六四年に定められたが、一八八四年の法令は大学の取締りを強化した。一八六六年には五大学が閉鎖された。大学制度そのものの改編については Wildman, A. K., The Russian intelligentsia of the 1890's, in ASEER, Vol. XIX, No. 2, 1960, pp. 161-62. Капранов, Н. К., Экономическая жизнь в Московском университете (1755-1965), 1956, стр. 116.
- (2) Wischnitzer, M., Die Universität Göttingen und die Entwicklung der liberalen Ideen in Russland im ersten Viertel des 19. Jahrhunderts, 1907. は一九世紀前半「ヨーロッパの大学」といわれたゲッティンゲン大学へのロシア貴族の子弟の留学の状況とそこから持ちかえった思想についてくわしく述べている。

- (3) Normano, op. cit., pp. 18-68. にイギリス・フランス・ドイツの経済学のロシアへの影響が概観されている。

- (4) Grellmann, Heyn, Kraft, von Schlozer (父子等), Hermann, Storch, Bayer, Backmeister など。一九世紀後半にロシアへ

来たドイツ人経済学者に Kankrin, Brückner, Bernhardi, Schmarz など。ドイツ人学者をよく多く迎え、ドイツ経済学の流入のひとりの窓口になったのは、ドルバート大学（一八〇二年創立）である。

(5) ロシアはイギリス経済学の普通主義的理論のあてはまらぬところとして注目をひいた。シュレーツァー C. von Schöler はモスクワ大学教授（一八〇一—二六）をとり、ロシアとアメリカの対比研究をおこない、またリガうまれのドイツ人で皇太子に経済学を講じたシントル H. von Storch はスミス経済学の普及者であったがロシアの諸制度についての歴史的・統計的論著も多い。ロツシャーは一九世紀前半の「ドイツ・ロシア学派」について語ることができるところ。Norman, op. cit. pp. 55-58.

(6) Карачев, Н. К., указ. соч. стр. 132, 133. モスクワ大学の経済学についてはこの書物に拠る。本文に名をあげた経済学者たちは、*История русской экономической мысли* のそれぞれの個所でとりあげられている。あわせて参照。

(8) シーベルの経済学の著作は Н. И. Знобер, *Избранные экономические произведения*, т. I, II, 1939 にあつめられた。解説序文はツァニコロフ。主要な著作として『最近の補足および解釈によるデ・リカードの価値と資本の理論』（一八七二）『社会経済研究におけるデ・ヴィド・リカードとカール・マルクス』（前著の改訂補足。一八八五）『原始経済文化概説』（一八八三）ほかにマルクス擁護の論争文、J. S. ミル、ロートベルトウスに関する学史的的研究などが収められている。石川郁男「シーベルのリカード・マルクス研究」（『表木大学経済学雑誌』十号）がある。

(9) 主著『蒸気運輸の農業におよぼす影響』（ワルシャワ、一八九〇）。かれはレーニンの『発展』を批判し、「非批判的批判」において反批判された。スタヴォルツォフとは別人である。ストルブエはフ・スタヴォルツォフに会って、マルクス主義者とも合法マルクス主義者とも異質な思想を感じたという。Kindersley, *The first Russian revisionists*, 1962, pp. 48-49. なお一九〇三年設立のペテルブルク高等工芸学院はメンデルレーエフの助言によりヴィッチがつくったもので、フ・スタヴォルツォフはここに迎えられた。この学院にはのちにストルブエも迎えられ経済学ではロシアで最もとも陣容の充実したものとなった。

(10) Липинен, указ. соч. стр. 180. 反動的・民族主義的『モスクワ報知』誌などが外国資本からのロシアの解放を叫んだ。ロシアの諸階級間および資本相互のあいだでの、保護関税をめぐる利害対立と、関税政策の変化については、Schulze-Gävernitz, op. cit., S. 243 ff. がふたんに富んでいる。ロシア資本主義の構造とくに部別・地帯別の分析については、和田泰衛「近代ロシア社会の構造」（『歴史学研究』別刷特集『世界史と近代日本』）を参照。

(11) Kindersley, op. cit., p. 180. ホームマヌオと政府との接近関係については Szeftel, M., *The form of government of the Russian Empire prior to the constitutional reforms of 1905-06*, in *Essays in Russian and Soviet History*, 1963, pp. 106-19. ㄱ

ムストヴォの自由主義について、レーニン「ゼムストヴォの迫害者たちと自由主義のハンニバルたち」(一九〇一、『全集』⑤)を参照。

#### 四 在野陣營の經濟思想

ツァーリズム体制そのものと反体制的知識人または集団とのあいだの、いわばひろい意味での中間的なところにおいて力づよい經濟思想の展開がみられないことが、ロシア經濟思想史のひとつの特徴であることはすでに述べた。ツァーリズムのもとでは、社会の在り方について思いをめぐらす知識人は反体制的立場に立つ決断に迫られ、そのことは亡命や非法活動への道に通じていた。ただし、經濟思想の力づよい展開は非法法の領域においてしかみられないというならば、それは云いすぎであつて事實にあわない。とくに一八九〇年代においては前稿でも述べたように、マルクス主義の文献にも一定の範圍で合法出版の道がひらかれ、ロシア資本主義論争はそれを利用して展開されたのである。しかしそのばあい、マルクス主義者たちが非法生活者であつたことはもちろんであるが、合法マルクス主義者の一部も非法活動に関係し、広義のナロードニキの総帥格のミハイロフスキーもそうであつたことは記憶にとどめられねばならない。合法マルクス主義者やナロードニキのなかには大学の教師もいたことは前節で述べたとおりであるが、合法マルクス主義もナロードニキ主義も、大学を中心拠点とするには在野的性格がつよすぎた。九〇年代の自由主義ナロードニキを反体制的立場ということはできないが、在野的性格のつよさは否定できない。

九〇年代のロシア資本主義論争は、そのように在野的すすんでは革命的な三つの集団によって展開された。元來、ロシアの資本主義化に対する問題提起そのものが在野的ないし反体制的知識人によっておこなわれたのであり、大学の經濟学者によってではなかつた。そしてロシア資本主義論こそは、農民解放以後十月革命にいたる時期におけるロ

シア経済思想展開の中心議題であり、経済学はロシア資本主義論によってはじめて真に具体的にロシアのものになったのである。

いきいきとした経済思想の主体が在野的・反体制的立場の知識人であったことに関連して、ロシア経済思想史のいまひとつの特徴が存在する。それは、古典経済学が定着しなかった反面、反資本主義の経済学がはやくから在野経済思想の基調となったことである。

ツァーリズムに対するラジカルな批判思想が、反資本主義の要素を帯びないで、経済的自由主義の主張を一環としてもつブルジョワ民主主義であったのは、デカブリストの乱（一八二五年）までである。農奴制に対する最初の急進的な批判者ラジーンシチェフ *Radzishchev* (1749-1802) はロシアにおける啓蒙主義のチャンピオンであり、かれの孤立性という運命はこの国における啓蒙主義の運命をしめしている。かれは経済思想においては自由主義的ではあるがさまざまな要素をひそめている。かれがスミスを読んだことはたしかにしても、スミスの撰取については早急には断じにくい。くだって前節で触れた、デカブリストの思想形成者のひとりツルゲーネフの『租税試論』(*Опыт теории налогов*, 1818) は、『国富論』第五篇を骨子として書かれたといわれる。かれがそれによって主張している租税協賛税、資本課税反対論、人頭税の廃止などの税制改革は、いうまでもなくブルジョワ的な改革のプログラムである。スミスはどのようにしてフランスの啓蒙思想などと結びつけられて、農奴制廃止のあとにうち建てらるべき社会のイメージの一部をかたちづかった。わたくしはさきに、『国富論』がツァーリズムの装身具となったことを述べたが、デカブリストにおいては『国富論』はブルジョワ的変革の思想的要因となったのである。もちろん『国富論』そのものは元来、ブルジョワ的変革を終えたあとの段階にうまれた経済思想である。『国富論』における市民社会の分析部分をすべて

とばして第五篇が学ばれたところに、農奴制ロシアの現実が反映されている。

ロシアの批判的在野思想の基調はゲルツェンとともに反資本主義に転じた。別の機会に指摘したように、ロシア国内において本格的に資本主義が発展するまえに、ロシア資本主義は思想的に断罪され、反資本主義の思想が知識青年のあいだに根をおろしたのである。

一般に後進国においては、その国自体の基礎過程の発展の程度にくらべて反資本主義思想が不均等的な早熟さを示す傾向があるが、その理由として考えられることは第一には、先進国における資本主義の現実の諸矛盾がすでに知られているために、人間解放の場としての市民社会のイメージが後進国においては成立しにくく、その限界性をはじめからつよく意識にのぼること、第二には、後進国は先進資本主義国ないしは世界資本主義のつよい側圧をうけて資本主義化の強行を、しかも資本主義の現代的水準への近迫を要求せられるために、前資本主義的社会構造の残基が清算されないうえに資本主義の継起的諸段階が重畳し、諸矛盾が集積することである。そのような諸矛盾の集積の場所とは現実に対する総体的・根源的な批判思想の発酵する場所である。と同時に、後進国であればあるほど、資本主義批判が資本主義のそとがわからだけの超絶的な批判になり、ロマン主義的あるいは観念論的な性格をつよめてゆく。マルクスがドイツから出立したこと、しかし同時にドイツのそとへ出てフランス、イギリスに移ることによって成熟したことは、含著のふかい事実である。一九世紀後半のロシアにおいては、右に述べた後進国の特殊の状況がとくにするとくあらわれた。四八年革命が反動の勝利をもっておわったヨーロッパの現状をみて、西欧資本主義と民主主義に絶望したゲルツェンは、祖国のゆくべき道を求めて苦悩し、ある面ではスラヴ主義に近接して農民共同体のなかにロシア的社会主義の原理を読みこんだ。それは一種の祖国への還帰によって社会主義をロシアの現実にあうものにしう

とした試みであり、そこには西欧的彼岸からのたんなる批判ではなく、ロシアの未来をロシアのなかからつくりだそうとする思想がある。しかし同時にまさしくそのような思想の實質のゆえに、ゲルツェンにはじまるロシア的社會主義は、資本主義批判においては資本主義のうちがわからの分析視角をもつことができなかった。たしかにチエルヌイシェフスキーはひとつの例外とみられるかもしれない。共同体社會主義を革命的民主主義と結びつけたこの博學のひとは、バステイア流のフランス俗流經濟學に対してスミスとＪ・Ｓ・ミルを經濟學の本道と認め、ミルを手がかりにして、「労働の人間學的性格」の考察を基礎として經濟學の批判的形成をくわだてた。その成果については評價がわかれており、ブレハーノフはそれを空想的社會主義の水準を出るものではないとしてマルクスに対する決定的なおくれを強調し、ソビエトの研究者たちは、それがマルクスに対してもおくれば認めながらも、「勤勞者の經濟學」として、ロシアの現實に對する變革の意味をつよく押しだす。いまこの点について立ち入ることはできないが、ただ一言さしはさむならば、ロシアの農民の立場からの發想という点での具体性・變革性と資本主義の客觀的經濟法則の考察における抽象性ということとは十分に両立しうるだけでなくむしろ表裏をなすのであって、むしろその点が、そして經濟學批判が「評註」という形にとどまらねばならなかった点が、ロシア經濟思想史の理解にとってひとつの要点であるように思われる。

ツァーリズム体制は知識層をひきつけることすくなく、資本主義化は進んでも市民社會は不在であつた。優秀な知識層の多数が反体制・反資本主義の思想的基調をもち、そのなかの尖兵が七〇年代のナロードニキ革命運動に結集し、そこにかたちづくられた獨特の革命家の人間類型はロシア・マルクス主義に繼承されてゆく。

マルクス自身がことの意外さにおどろくほどに『資本論』がロシアで迎えられたのは、そのような反体制・反資本

主義的な思想基調がロシアにあったからである。たしかに『資本論』は七〇年代にはナロードニキ革命運動には結びつかなかった。評論家ミハイロフスキー、マルクスの学問上の弟子をもって自任していたダニエリソン、前述の経済学者ジーベルなど、七〇年代に『資本論』をロシアへ紹介したのは革命家ではなかったし、『資本論』のロシアへの適用については否定的ないし限定つきで考えられた。しかしたとえロシアの現実にはあてはまらぬにしても、『資本論』は資本主義批判の経済学、しかも精緻にして徹底的な資本主義批判の経済学として歓迎された。このことは重要である。

在野思想におけるそのような親『資本論』的気風を素地として、つぎのような一見変妙な現象があらわれた。それは、九〇年代のロシア資本主義論争を担ったマルクス主義、合法マルクス主義、ナロードニキ主義のうち、思想のレヴェルにおいては急進的なブルジョワ合理主義というべき合法マルクス主義が主として『資本論』に依拠しただけでなく、思想のレヴェルにおいては反マルクス主義を旗じるしとした九〇年代の自由主義ナロードニキまでが、経済学としては『資本論』を採ったことである。九〇年代の批判的在野思想における一種の『資本論』の支配こそは、ロシア資本主義論争において注目すべき事実である。わたくしは別稿において、ロシア資本主義論争にたちかえって、それぞれの思想の『資本論』把握とそれにもとづくロシア資本主義論の型のちがいをあきらかにしよう。それによって本稿ではたち入ることのできなかつた九〇年代の在野陣営の経済思想の内容が知られるはずである。

- (1) 拙稿「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」(『経済論叢』八九巻一号)第二節を参照。
- (2) 大学の経済学者がロシア資本主義論に発言しなかつたわけではない。ジーベルはヴォロンツォフの『ロシアにおける資本主義の運命』をいちはやく批判した。Ок. Kautskaya в России, 1882, Загреб, 1909, т. I, стр. 661-74. ユガン・ブルガコフも教師であつたし、カプルコフはヴォロンツォフ流のロシア資本主義論を説いてゐた(『Капустин, 1909, т. I, стр. 151-54.』)。しかし大学におけるロシア資本主義



論争はいわば二次的、周辺のものであった。九〇年代におけるロシア資本主義論争の場としては、雑誌・書物のほかに、帝國自由経済協会があった。同協会はエカテリーナ二世が重農主義への心酔期につくったもの（一七六五年）で、主として農業技術の普及などに努めるものであったが、一八九五年にストルヴェ、ツガンら合法マルクス主義者がいっせいに第三部会に入会し、ナロードニキとロシア資本主義について活潑な論戦をおこなった。Opium, B. B., Boznye ekonomicheskie obozreniya v Pechm, 1863. cyp. 4, 45, 166-67. Kindersley, op. cit., pp. 194-97.

(3) 渋谷一郎訳『ペテルブルグからモスクワへの旅』の巻末には一九五八年までに出たラジーンチエフに関する邦語文献目録が添えられている。松田勇「A・H・ラジーンチエフの経済思想」（冊子）が多くの面を述べている。はかに渋谷一郎訳「ロシア重商主義（三）」（前出）の附録を参照。ラジーンチエフは貿易については保護主義的であった。価値論は重商主義的である。

(4) 佐藤博「エヌ・イ・ツルゲーネフの租税論」（花戸龍蔵博士古稀記念論集「財政学の課題」所収）参照。ツルゲーネフはデカブリストのなかでは穏和派の思想家であった。作家のツルゲーネフとの関係は未詳。

(5) 本節註(1)の論文を参照。

(6) 出口勇蔵編『四訂経済学史』第五章「ローマン主義」におけるフランスとドイツのローマン主義の対比を参照。

(7) 松田道雄「近代化の担い手と批判者」（思想一九六三、十月号）のゲルツェン解釈を参照。

(8) チェルヌシシエフスキー「J・S・ミル経済学原理」への評解（上）西沢訳、岩波文庫、六七頁。フオイエルバツハ哲学を基礎とするチェルヌシシエフスキーの立場が端的に示されている。チェルヌシシエフスキーの経済学に関する著作はチェルヌシシエフスキー『全集』全十五巻、（一九三九—五〇）および『経済学選集』全三巻（一九四八—四九）に収められている。ゴルロフを批判した「資本と労働」（一八六〇）、「J・S・ミル経済学原理」への評解（一八六〇、邦訳はこの前半部）『ミルによる』経済学の概説（一八六〇）がもっとも主要なもの。

(9) プレハノフは、リカードが資本主義の現実のものとして理論をたてたのに対して、チェルヌシシエフスキーはそれから離れた抽象論であるとし、チェルヌシシエフスキーはマルクスを知らなかったのだが、マルクスと同時代のものであることはまったくおくられており、そのおくれの原因はロシアの経済的基盤のおくれにあると結んでいる。Pechanov, N. G., Tchernischevsky, 1894, S. 338. チェルヌシシエフスキーの経済思想に関するソビエト文献はおびただしいが、革命的民主主義の経済思想として、農民を主体とする働くものの経済学として把握するという視点は共通しているようである。「働くものの経済学」（ローゼンベルグ・ブリュミン）「農民的な働くものの理論」（ツァゴロフ）等。プレハノフはそれに反して、資本主義の経済理論としての正誤を、マルクスを基準として、裁定することに主眼を置いている。チェルヌシエフスキーに関する邦語文献はかなりある。石川郁男「チェルヌシシエフスキーの〈働かざる者の理論〉——その形成——」（茨木大学政経学会雑誌「十四・十五合併号」）は「資本と労働」までをくわしくたどっている。

〔本稿は昭和三十九年度文部省科学研究費（各個研究）による研究成果の一部である〕